
虚闇幻想郷

風上都

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

虚闇幻想郷

【Nコード】

N7315F

【作者名】

風上都

【あらすじ】

うろやみのながれるそのなかで、『ぼく』ははじまったの。

一節 「その」「なまえ」「を」「つげる」

「あめ。かぜ。くも。ひかり。つき。・・・きみのなまえはなあに？」

それでは皆様、始めよう。

黒くて深い、やさしい虚闇の物語を。

虚闇幻想郷 一節

「その」「なまえ」「を」「つげる」

『彼』に意識が芽生えたとき、辺りは一面のウロヤミでした。

踏み締めた足の裏には大地の感触。

澄ませた耳には風のそよぎと鳥の声。

凝らした眼には真っ黒で真っ黒なウロヤミと、当たり前のように広がる草や樹やイキモノたちのカタチ。

伸ばし広げた手には五本の指と、掴みどころのないスカスカとしたナニカの感触。

指先を握り、拳を作っては解き、『彼』は唐突に、指先をすり抜け

るそのスカスカの「なにか」が、このウロヤミの隅々までを満たした「くうき」であるということを、誰に教わったワケでもないのに認識しました。

『彼』は胸いっぱいいに空気を吸い込み、吐き出します。

その行為こそが「こきゅう」であるのだと、やはり『彼』はひとりでに理解しました。

けれども、『彼』は未だに自分がどうしてココにいるのか、それを理解することはできません。

『彼』は虚ろで空白で、まっさらな認識は、まるで生まれたての赤ん坊のよう。

幼い認識は、理解できないことを考えるということが無意味であるということをし、漠然と判っていました。

ですから『彼』は、難しいことはさておき、まず自分のカタチを確認してみることにしました。

先程から「くうき」を掴もうと動かしていた手を、顔の前にかざします。

折れそうに細い、白い手。

覚えがありません。

続いて、地面を踏み締めている自分の足を見下ろします。

折れそうに細い、白い足。

覚えがありません。

足から上に、どんどん視線を上げていきます。

壊れそうに頼りない、細い腰。

覚えがありません。

限りなく平坦で、筋肉もほとんどついていない胸。

覚えがありません。

なんとか首も確認しようと頭を下げますが、頭は首の続きでしたので、頭を下げると見えません。

それなら顔でも確認しようとして、『彼』は困ったことに気が付きました。

『彼』は自分の顔を見る方法なんて、知らなかったのです。

その方法を考えようとしても、そもそもどんな手立てがあるのかさえ知らなかったので、考えることすらできません。

『彼』はますます困りました。

自分がどのようにして自分のカタチを確認したのか、それをどうしても知りたかったからです。

頭を向ければカタチが判ったので、自分の顔にその理由があるのは間違いないのです。

けれども、やはり『彼』は、自分の顔を確認する手段を持ちません。ですから『彼』は、どうにか自分の顔を確認できないかと、無意識に足をひよい、と踏み出しました。

さく。

草を踏み締める音と、足の裏に生じた、異なる感触。

『彼』は驚き、踏み出した足を元の位置へと戻します。

音はせず、感触も大まかには同じでしたが、微妙に草や土の触れる感覚が違います。

どのぐらい逡巡したのか、『彼』はもう一度足を上げ、また一步踏み出してみました。

さく。

草を踏み締める音と、足の裏に生じる、異なる感触。

『彼』も今度は驚きませんでした。

そしてもう一步、もう一步と、足を交互に踏み出してみます。

さく。さく。さく。さく。さく。

そして『彼』は、その行為が「あるく」ということであるのだと、意識もせずに理解しました。

自分が歩きまわれるのだと理解すると、『彼』は無性に嬉しくなりました。

同時に、『彼』は自分が「うれしい」と感じていることも、理解したのです。

ますます嬉しくなった『彼』は、さくさくと草を踏み締め掻き分けて、辺りを方々歩き回ってみたのです。

ところが、暫く歩いていると、初めは面白かった「あるく」という行為も、なんだか少しずつ面白くななくなってきました。

なんだか体が重く、歩くのが大変になってきたのです。

『彼』はそれが「つかれた」状態であるということをし、なんとなく理解しました。

それに、足の裏がなんだかズキズキしたのです。

その感覚が「いたい」ということなのだとすぐに理解して、『彼』は自分の足の裏を確認してみました。

足の裏は、歩いたときに木の葉や木の根や木の枝などで傷付けたものか、あちこち破れて赤いものが滲んでいます。

破れた裂け目が「きず」、滲んだ赤色が「ち」であることを、『彼』は理解します。

「きず」「が」「でき」「ち」「が」「でれば」「いたい」ということ。

『彼』は続けて、そのことを学習したのです。

学んだばかりの足の痛みに、『彼』はすっかり歩く気をなくして、地面に座り込んでしまいました。

足の傷は浅いものの、数が多く、とても真っ当に歩けるような状態ではなかった、というのも座り込んだ理由の一つでした。

とはいえ、傷が癒えるまでずっとこうして座っているワケにもいきません。

たとえ一旦は傷が癒えたとしても、歩き出したらすぐにまた、新しい傷がたくさんできるだろうことは疑いようありません。

『彼』もそれには気付いたようで、どうにか傷を作らず歩ける方法はないものだろうかと考えました。

しかしながら、それは自分の顔を確認する手段さえも知らない『彼』にしてみれば、やはり考えることさえできないような難問なのです。

『彼』は困りました。

顔が確認できなかったときより、更に一層困りました。

歩けなければ食べ物も探せません。

今のところ『彼』は、自分がものを食べないと生きていられないということを、まるで知らない様子でしたが、それに気付くのも時間の問題です。

動けなくなってしまったことに困って困って困り抜いていた『彼』はふと　草を踏む、さくさくという音を耳にしました。

『彼』にはそれがどういうことかは判らない様子でしたが、何か今までとは少し違うということだけは理解していました。

さくさく、さくさく。さくさく、さくさく。

さく。

「誰かいるの？」

がさり。

繁みを掻き分けて、ウロヤミの奥から姿を現したのは、『彼』と同じぐらいの背丈の、黒い髪と黒い瞳を持った女の子。

『彼』は少なからず驚きましたし、彼女もどうやら驚いた様子でした。

「どうしたの、こんなところで。皮も纏ふくわず、足も血だらけ。彼方もしかして困っているかしら？」

眼をくりくりさせながら、女の子は『彼』の顔を覗き込みます。

『彼』はといえば、動転してしまっているようで、反応ひとつ返さ

ずに、ただ黙って女の子の顔を見返すだけでした。

女の子の顔には、「め」があって、「はな」もあって、何よりも驚いたのは、音を発する「くち」があったということです。

『彼』の視線を受けて、女の子は少しだけ居心地悪そうに体をもじつかせ、もう一度『彼』に声をかけてきました。

「あのね、私はクロイキ。森の樹たちが彼方のことを教えてくれたの。困っているなら手助けぐらいはできるけど、困っているのかしら？」

『彼』は答えません。

と、いうより、答えられなかったのです。

女の子が「ことば」を使って「はなし」をしようとしていることは理解したのですが、『彼』にはそうした場合に、どう対応したものが判らなかつたからです。

なおも黙ったままの『彼』に対して、女の子は別段気分を害した様子こそありませんでしたが、ひたすらに居心地が悪そうに体をもじつかせています。

「あのね・・・わたし、クロイキなんだけど。彼方の名前を教えてくださいませんかしら？」

彼方を何て呼べいいのか判らないわ、と言って、女の子は『彼の顔を凝視しました。

「あ　　う、」

見つめられたことにたじろいだ『彼』は、喉の奥からかすかに声を洩らしました。

そして声を出したというその事実には、『彼』は物凄く驚いたようでした。

そう、『彼』はそのときようやく、自分にも「くち」があり、自分でも「ことば」を話せるということを知り、理解したのでした。

「ことば」。

そう、「ことば」です。

女の子の意思を通じ合わせたいのなら、なにかしら「ことば」を発する必要があります。

けれども、『彼』は「ことば」という概念を理解したばかりで、どいう言葉があるのかはよく判りません。

『彼』は女の子が何を言っているのかは判るのですが、それに応える方法が判らなかつたのです。

女の子が痺れを切らしたように、『彼』に向かって話しかけようとした刹那。

「あ　　お、『おんなのこ』」

『彼』がようやく「ことば」をつむぎ出したのでした。

「お、『おんなのこ』、『は』『くろいき』。『ぼく』『は』『は』『ぼく』『は』」

やつのことで会話が成立するかと思えたのですが、『彼』の言葉は尻すぼみにどんどん小さくなり、やがて完全に沈黙してしまっただけでした。

『彼』は今まで考えもしなかったのです。

自分の「なまえ」がなんなのか、なんて。

思い出そうにも考えようにも、「なまえ」の概念など先程理解したばかりです。

そんな『彼』に、名前なんて思いだせるハズもなかったのです。

そうして結局黙り込んでしまった『彼』を困ったように見つめて、女の子はやっぱり無言のまま立ち尽くすばかり。

そうやって随分と永い時間立ち尽くしていた『彼』でしたが、結局名前なんて思い出せるハズもなく、やっぱり『彼』も、困ったように女の子を見つめ返しました。

女の子は、『彼』が困り果てているのを察してくれたのでしよう、ただ立ち尽くす『彼』に優しい声音で語り掛けます。

「自分の存在なまえがわからない？それとも会話いはいがわからないのかしら？」

『彼』はそう問われてもしばらくの間、まるで返事ができなかった

のですが、女の子の優しい顔を見つめているうち、気分が少しずつ
落ちてきてきた様子でした。

「あ……う。『ぼく』『は』『なまえ』『を』『しらない』……」

ようやく『彼』が自分の中から搾り出したその言葉を聞いて、女の子は怪訝な顔をします。

「自分の起源を識なまえらない？……へえ、そういう物ひともいるのねえ。
とても珍しいわ……」

そう言つて、女の子はしげしげと『彼』を見つめ、やがてその様子
に何か思ふところがあつたでしょう、徐に『彼』の手を引きまし
た。

「色々なことを教えてあげましょう。だからこつちへいらつしゃい。
……森の樹たちは、きつと彼方を歓迎するわ」

女の子は優しく微笑みながら、『彼』の手を引いて歩き出しました。

『彼』は少しだけ戸惑いましたが、女の子のことを疑うことはまだ
知らなかったので、そのまますると女の子に従います。

歩くたびに『彼』の足は酷く痛みましたが、痛みに堪り兼ねて立ち
止まるたび、女の子が『彼』の傷付いた足を撫で、そのたびに『彼』
の痛みは和らぎました。

そうした小休止を十回も繰り返した頃でしょうか、やがて視界が開
け、まるで丘のような場所が目の前に広がります。

なだらかな丘の上にはとても大きな大きな一本の樹。

そしてその後ろには、たくさんの樹がずらりと肩を並べて立っていました。

『彼』はその「き」と「もり」を認め、それを理解します。

『彼』の手を引いていた女の子は、そんな『彼』の様子を眺めて、興味深そうな顔をしましたが、何も訊くことなく歩き続けます。

ざくざくと傷む足に、『彼』の細い膝は今にも崩れそうなほどだったのですが、今度はどうしてか、女の子に立ち止まる様子はありません。

痛む足をそのままに、なだらかな丘をゆっくりとゆっくりと『彼』と女の子は上ります。

やがて辿り着いたその場所は、大きな大きな一本の樹の根元。

真っ黒で真っ黒なウロが口を開けた、とてもやさしい樹の下でした。

「さあ、着いたわよ。痛かったでしょう、足を見せて御覧なさい」

優しく掛けられたその声に、とうとう『彼』も耐え切れなくなって、その場にぺたんと座り込んでしまいました。

傷だらけの『彼』の足を手に取り、その状態を確認すると、女の子はとても広いウロの中にこそこそと潜り込み、中から何かを持って出てきます。

「少し痛むかもしれないけれど、我慢してね。」

そう言いながら、女の子は『彼』の足をもう一度手に取って、あちこち開いた傷口に、何かどろりとして粘ついた、蜜のようなものを塗りたくりました。

「……………」

言われた通り、塗られた直後は酷く痛み、『彼』は咽喉の奥から呻き声を洩らしました。

けれども、少し時間を置くと、その痛みは熱に変わり、痛みは嘘のように引いていきます。

足がじんじんと火照りましたが、痛みはもうほとんど跡形もありません。

「どう？効いたでしょう。キズをふさぐには、こうするのが一番なの」

女の子は優しく笑って、『彼』をウロの中へと招き入れます。

ウロの中はとても広く、もしも二人で寝転がっても充分すぎるぐらいの広さがあって、天井の高さはそれよりももっとずっとありました。

そして、何処からかほんのりと香る甘いにおい。

そのにおいを嗅いだ瞬間、『彼』は突然、まるで自分の内側がこっ

そりとなくなってしまったかのような気分になってしまいました。

そう、それは初めて意識した「くうふく」です。

「くうふく」ということを理解した『彼』でしたが、それをどうすれば収められるのかは、まるでさっぱり判りません。

困り果てた『彼』が、ぺこぺこに空いたお腹を押さえたとき、不意にお腹が盛大な音を立てて鳴りました。

自分の体の内側から響いたその奇怪な音に、『彼』は一瞬飛び上がらんばかりに驚いて、危うく尻餅をついてしまうところでした。

もちろん、ソレがどういう意味なのかはすぐに理解したので、それ以上慌てることもなかったのですけれど。

そんな『彼』の様子を見ていた女の子は、クスクスと声を立てて笑い、『彼』に向けて何かを差し出します。

「はい、どうぞ。これを食^{なめ}べればお腹は随分と落ち着くハズよ」

そう言っただけで差し出されたそれは、どうやらついさっき足に塗り込まれた蜜のようなもの。

おずおずと受け取ったそれを、『彼』は誘われるままに口を近づけ、ぺろりと舐めてみました。

途端に口の中に広がる色々な感覚に、『彼』は心底驚きました。

ソレは「あまく」「いい」「におい」「で」「もつと」「たべたい」

ということ。

一言で表すなら、それは「おいしい」という感覚だということを、『彼』はすぐに理解しました。

それを理解してしまえば、あとはもう喰い尽くすだけです。

たくさんあったハズの蜜をぺろりと平らげ、彼は穏やかになったお腹を軽くさすります。

「もの」「を」「たべて」「おなか」「が」「ふくれる」ということ。

『彼』は「たべる」ということを理解して、このとき初めて、自分は食べないといけない、ということをも理解したのでした。

『彼』のお腹がふくれたのを見届けた女の子は、それから色々なことを語り掛けました。

呼吸すること。歩くこと。嬉しいこと。疲れること。痛いこと。話すこと。食べること。覚えたそれらの他に、たくさんたくさん女の子は教えてくれました。

それは本当にたくさんで、とてもとても長い長い時間を掛けて、『彼』はたくさんのかたちをひとつずつ理解していきました。

もうどれぐらいの時間が流れたのでしょうか。

その時間の経過という概念も教わった『彼』は、随分と長いこと色々なことを教えてもらったのだということを意識します。

もう女の子　クロイキさんは、あらかた教えられることは教えてしまったらしく、今度は色々なことを訊いてきました。

名前のこと。何処から来たのかということ。いつからいたのかということ。何をしていたのかということ。何をしたかったのかということ。そして　何をしなくてはいけないのかということ。

何も応えられなかった『彼』でしたが、どうしても最後のその問い掛けにだけは、何か漠然とした感覚があったのです。

「ぼくは　きつと、ぼくはぼくをさがしている。もうひとりのぼくに　あわなくちゃいけない」

そう応えて、『彼』はウロの中で勢いよく立ち上がりました。

口に出した途端、居てもたつてもいられないような焦燥が、まだまだ未熟な『彼』の認識をちくちくと刺激し始めたのです。

そんな『彼』の様子を見て、興味深そうな顔をしていたクロイキさんが、徐に口を開きます。

「もう一人の、ぼく？それはどういう意味なのかしら・・・」

「もうひとりのぼく。ぼくはきつとふたりいるんだ。ぼくはきつとひとりじゃぜんぜんたりてないんだ」

使い慣れない言葉でたどたどしくそう言って、『彼』は困ったようにクロイキさんを見つめました。

いよいよ強くなる得体の知れない焦りがあるにも関わらず、『彼』には一体どうしたらいいのか、皆目判らなかつたのです。

クロイキさんはそれをどうやら理解した様子で、軽くうつむいて思案するような素振りを見せました。

「・・・。うん、そうだね、それじゃあ私が、一緒にもう一人の彼方を探してあげる。必ず見つけてあげるから、そんなに困らないで」

ほんのりと笑って、クロイキさんは『彼』の頭を優しく撫でました。

「それじゃあ・・・何処へ行けば会えるかとか、そういうことは判るの？」

クロイキさんはそう訊いてきましたが、もちろん『彼』はそんなことなど判りません。

黙って首を振るだけの『彼』を見て、何か納得したように頷いて、クロイキさんはウロの中で立ち上がりました。

「なら、とにかく探してみるしかないでしょうね。・・・うん、私も何処かへ出かけるのは初めてだけれど、きっとどうにかなるでしょう」

そう言って、クロイキさんは『彼』の華奢な手を取って、優しい力で引きました。

「さあ、行きましょう。もう一人の彼方を探しに」

「・・・うん。ありがとう、くろいきさん」

「いいのよ。私も、この森を離れたことなんてなかったんだもの。きつと外は広くて素晴らしいわ。広い世界を、私だって見てみたい」

憧れるような瞳でクロイキさんは呟いて、『彼』の手を引いたままゆっくりとウロの中から這い出ます。

『彼』も引かれるままにウロの中から這い出て、引かれるままに歩き出します。

と、其処でクロイキさんは大事なことに気が付いたらしく、『彼』の手を取ったままぴたりとその場に立ち止まりました。

「・・・そうね。彼方がもう一人の彼方を探すというのなら私は彼方についていく。もう一人の彼方が必要なのはあなた。だから、その道は彼方が選びましょう」

そう言つて、クロイキさんは引いた手を前に差し出して、『彼』を自分の前に立たせます。

『彼』は少しだけ戸惑った様子でしたが、クロイキさんにもう一度促されると、おずおずと最初の一步を踏み出しました。

クロイキさんは優しく笑います。それでいいの、と。

『彼』はその意思に頷き返して、ゆっくりゆっくり自分の道を歩き出します。

まっくらまっくらウロヤミの流れるこの世界で、『彼』は漸く自分だけの道を選ぶことができたのでした。

『彼』の歩みは最初はゆっくり、次第にどんどん足早に、いつしか懐かしくさえ思っただになったたくさんの黒い樹たちの森を抜け、クロイキさんに引かれて歩いた優しい丘を越え、自分が始まった場所さえも通り越して、見たことのない新しい景色にまで進んでいきます。

いつの間にか繋がっていた手と手は離れ、ひとりとひとは同じ方向を目指して歩き、足が痛めば体を休め、お腹が空いたら食べ物を探して食べました。

そうして幾つもの丘を越え、幾つもの森を抜け、幾つものウロヤミを掻き分け進んだその先で、ひとりとひとは立ち止まりました。

クロイキさんの様子が、なんだかおかしく思えたからです。

「・・・くろいきさん？どうしたの、さっきからあるくのがおそくなってしまったみたい」

「判らない。判らないけど、なんだか身体が苦しいの」

「くるしい・・・いたい？いたくて、くるしい？」

「痛くはないの。痛くはないけど、苦しいの」

どうして苦しいのか、そして何がおかしいのかは、『彼』にもクロイキさんにも判りませんでした。

ただ、その苦しさは、歩けば歩くほど、懐かしいあの森から離れれば離れるほど、どんどん募っていくらしいことは、どうや

ら二人にも理解できたのです。

『彼』は何故か、とても心細い気持ちになりました。

クロイキさんの苦しそうな様子を見ると、『彼』の足取りは重く、そして胸の内側にはウロヤミが凝ったように、ずっしりと厭な気持ち湧いてきます。

けれど、クロイキさんはそんな様子の『彼』を見て、心苦しく思ってしまったのでしょうか。

いつしか苦しいのを我慢して、にっこりと笑うようになったのです。

「大丈夫。きつと今まで歩いたことのないほどたくさん歩いたから、それでカラダが傷んだだけよ。少し休めば良くなるわ」

そう言って、クロイキさんは何度か立ち止まって、その度にゆっくり身体を休めました。

けれども、その苦しさは、休めど休めど消えるどころか強くなり、いつしか彼女は笑うことさえできなくなりました。

とうの昔にあの懐かしい森は見えません。

優しいやさしいあの丘の記憶も、今は遠いウロヤミのかなた。

それでも歩き続けた道の先、とうとう彼女は力尽きました。

『彼』がクロイキさんの身体を慮り、後ろにいるはずの彼女を振り向いたとき。

『彼』の後ろには誰の姿もありませんでした。

道を見渡せば、其処はいつの間にか細く伸びた崖の上。

辺りは渦巻く一面のウロヤミだけ。他には何も見えません。

「……くろいきさん？」

『彼』の言葉は、誰のところへも届きません。

ゆっくりゆっくりと渦巻くウロヤミの中に、するするふわふわと消えてしまうだけ。

「くろいきさん……？」

『彼』は幾度も幾度も振り返り。

歩み進んできたその道は、もうあの懐かしい森には繋がってはおらず。

そして結局、『彼』はそのウロヤミに、誰の姿も見付けることはできなかつたのでした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7315f/>

虚闇幻想郷

2010年10月9日01時19分発行